

若年労働者の現状と高校教育の課題 第4回

東京大学大学院教育学研究科 教授 本田 由紀

1. 専門高校生調査から見る「専門教育の意義」

本連載の第3回では、日本教育学会が実施した調査のデータを用いて、卒業者の現状や主観的評価という観点から、高校専門学科の「教育の職業的意義」を確認した。それに続いて今回は、専門高校・普通科高校の2年生を対象とした別の調査データに基づき、すでに在学中の時点から、高校における専門教育が生徒にとって様々な「意義」をもちえていることを指摘していきたい。

使用するデータは、東京大学教育学部比較教育社会学コースの必修科目である「教育社会学調査実習」の一環として行われた調査の結果であるⁱ。この調査では、2008年10月下旬から12月中旬にかけて、都立の専門高校17校（工業科9校、商業科4校、農業科2校、その他の学科2校）および普通科高校3校の高校2年生に調査票を配布し、教室内における集団自記式で回答を得た。普通科高校については、入試難易度が今回調査対象とした専門高校と同程度である高校に調査を依頼したⁱⁱ。最終的な有効回答者数は2830名である。ただし、本調査の有効回答者数の学科の比率は、母集団である都立専門高校生の学科の比率と対応していないため、分析に先立って、サンプルが母集団である都立専門高校生の縮図となるように再サンプリングを行った。再サンプリング後のサンプル数は工業科

678名、商業科571名、農業科151名、その他の学科301名、普通科453名、合計2154名である。

比較教育社会学コースでは毎年、学生たちが調査実習の成果を報告書にまとめるとともに、東京大学五月祭の一環として開催するシンポジウムで発表している。以下の本稿では、学生による分析結果の中から、専門高校に関する興味深い知見を紹介していこう。

2. 学習意欲の向上

まず、生徒の学習意欲を高める上で高校での専門教育がいかなる効果をもっているかについて検討しよう。

個々の生徒が「学校の勉強に積極的に取り組んでいる」かどうか、「学校での勉強が嫌い」かどうか、「社会に出たら、もう勉強はしたくない」かどうかの3点について、中学2年時（回顧的回答）から現在の高校2年時への変化を示したものが表1であるⁱⁱⁱ。各時点における肯定的回答を「高」、否定的回答を「低」とし、変化の組み合わせを作成して分布をみると、3つの指標のいずれについても専門高校は普通科高校と比べて「低→高」および「高→高」の比率が高く、当然ながらこれらを合計した比率も高い。この比率の差はそれぞれ統計的に有意なものである。すなわち、専門高校では入試難易度が同水準の普通科高校よりも生徒の学習意欲を向上させるか、高水準に維持する傾向が強いといえる。

		低→高 (a)	高→高 (b)	a+b	高→低	低→低	合計
勉強への積極性	専門高校	34.2	22.0	56.2	8.7	35.1	100.0
	普通科高校	29.4	17.4	46.8	9.4	43.9	100.0
勉強が好き	専門高校	23.4	12.3	35.7	9.8	54.5	100.0
	普通科高校	16.4	9.1	25.5	13.8	60.7	100.0
将来の勉強継続意欲	専門高校	20.7	19.4	40.1	7.7	52.1	100.0
	普通科高校	16.8	15.5	32.3	10.5	57.2	100.0

表1 専門高校／普通科高校別 学習意欲の変化

なぜ専門高校でこのような傾向が表れるかを探るために、(生徒から見て)「教え方が上手な先生が多い」という要素と「高校で学んでいる内容は自分の将来に役立つものだと思う」という要素に着目し、まず専門高校／普通科高校間でこれらを比較したところ、前者を肯定する者は専門高校では55.4%、普通科高校では37.4%、後者を肯定する者は専門高校では62.6%、普通科高校では35.3%と、いずれも専門高校のほうが明らかに高い比率を示した。

さらに、専門高校の内部で見ると、これら2つの要素を肯定する者ほど表1の3つの指標について「低→高」および「高→高」の比率が高くなっているため(図表は省略)、このような教師の教授スキルや教育内容の将来的な「意義」の実感が、生徒の学習意欲を高める方向に作用していることが推測される。

また、「おもしろいから学習する」「新しいことが知りたいから学習する」「生活するなかで役に立つから学習する」という3つの項目を合成して作成した「内発的動機づけ」尺度に関する分析結果についても、同様の結果が得られている^{iv}。「内発的動機づけ」の水準が高い生徒は専門高校では58.6%、普通科高校では43.6%と、やはり前者の方が多くなっている。

「内発的動機づけ」を高める要素として、「作業を通して何かを作りあげる授業」および「グループで協力して課題を達成する授業」が授業

全体に占める比重と、「授業で学んだことを、学校外で活かせる機会が多い」かどうかという3つの要素に着目すると、まず作業を用いた授業については専門高校では「多い」が2割、「半分くらい」が3割で合わせて5割を占めるが、普通科では両者を合わせて2割にすぎず、「少ない」が8割を占めている。課題達成授業については、専門高校では「多い」11.5%、「半分くらい」24.9%であるのに対し、普通科ではそれぞれ2.5%、12.9%にとどまる。また授業内容の学校外での活用については、専門高校では4割が肯定しているが、普通科では2割しか肯定していない。このように、この3項目はいずれも普通科と比較して専門高校のほうが水準が高い。

そして、専門高校内部で見ると、これらの頻度や水準が高いほど生徒の「内発的動機づけ」が高くなっている(図表は省略)。それゆえ、やはり専門高校における授業に関するこれらの特徴的な諸要素が、普通科よりも生徒の「内発的動機づけ」を高める効果をもっていることがうかがえる。

さらに、専門高校生は普通科に比べてクラス内友人数が多い傾向があり(「10人以上」の比率は専門高校では27.5%、普通科では17.0%)、また専門高校内部ではクラス内友人が多い者ほど学習意欲や学習内容の有用感が高まっている^v。興味深いのは、そうした傾向が、専門高校への入学が本意であった者において、特に顕著に見られることである(図1)。高校入学時に

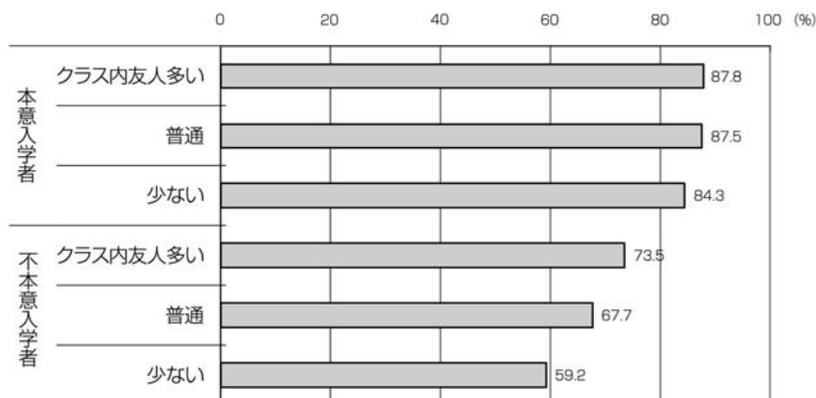


図1 本意/不本意入学別・クラス内友人数別専門教科の勉強に熱心な者の比率(専門高校生)

「ぜひこの高校に入学したかった」と考えていなかった者を不本意入学者とみなすと、その比率は専門高校でもほぼ半数に達している（ただし入試難易度が同程度の普通科では7割に及ぶ）。しかし、高校への入学が本意でなかった者でも、入学後にクラス内で多くの友人ができれば、専門教育の学習に積極的に取り組む傾向が高まるといえる。専門高校では個々のクラスと個々の学科が対応していることから、クラス内で友人ができやすいと推測されるが、そのことも学習意欲の向上に役立っている。

以上のように、教員の教授スキル、作業やグループによる課題達成に力点を置く授業形態、学習内容が現在の生活および将来に対して有用と感じられる度合い（≒「意義」）、クラスの友人関係の緊密さなど、専門高校に特徴的な様々な要素が、生徒の学習意欲を高める効果をもっていることを、分析結果は示唆している。

3. 将来観への効果

続いて、専門高校の教育内容が、生徒の将来観にどのような影響を及ぼしているかについて検討しよう。

専門高校の生徒の中では、「専門教科で得た知識や技術が今後の人生の大きな支えになると思う」という質問項目について「とてもあてはまる」と答えた者が3割、「まああてはまる」と答えた者が5割弱であり、合わせて8割近く

がこの項目を肯定している^{vi}。この結果のみを見ても、高校における専門教育が、生徒にとっていかに大きな「意義」をもっているかを知ることができる。

このような「専門性が支えになる」という意識をもつことが、生徒のそれ以外の行動や意識とどのように関係しているかを示したものが図2である。ここに示した5つの項目のいずれについても、「専門性が支えになる」ことが「あてはまる」者においてポジティブな結果が表れているが、特に注目すべきは右側の2項目、すなわち「今学んでいる専門教科の知識や技術を活かさない職業にはつきたくない」および「今学んでいる専門分野以外の知識や技術をこれから積極的に身につけたい」という意識である。

このうち前者については、「専門性を支えにしている」ことが「専門性を活かした仕事につきたい」という意識と順接的な関係をもつことは理解に難くない。しかしきわめて興味深いのは、「専門性を支えにしている」ことが「専門以外のことも学んでゆきたい」という意識をも高めているということである。つまり、高校における専門教育は、狭量で硬直的な専門性依存を招くのではなく、学んだ専門性を立脚点として、より広い知識や技術をも習得していきたいという意識を喚起しているのである。

筆者は、このように何らかの専門性を切り口

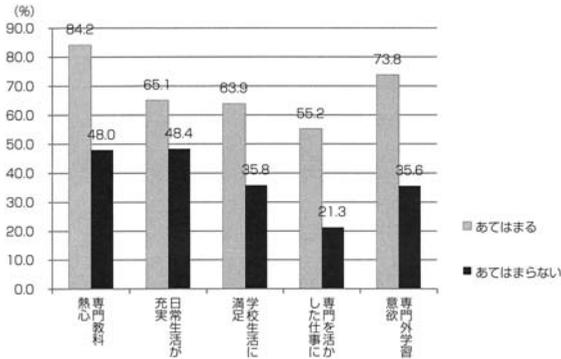


図2 「専門性が支えになる」意識の効果(専門高校生)

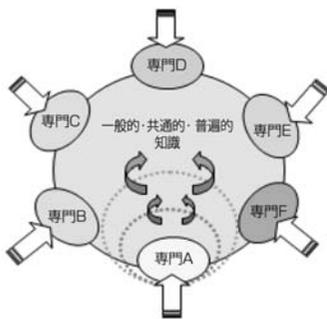


図3 「柔軟な専門性」(flexspeciality) の概念図

ないしきっかけとして、隣接分野へと知識や技術の範囲を広げていき、徐々に一般性や抽象性の高い知識や技術の習得に近づいていくプロセスを、「柔軟な専門性」(flexspeciality)と呼んでいる(図3)。この概念はもともと、望ましい専門性のあり方を理念的に示すために、「柔軟性」(flexibility)と「専門性」(speciality)という2つの言葉を合成して筆者が造り出した

ものである。今回の分析結果においては、そうした「柔軟な専門性」に相当するものが、現実の専門高校においてすでに形成されつつあることが見出されたのである。この意味でも、高校段階における専門教育は、その後の生涯における柔軟な展開や転換の素地を生徒に形成し得るものとして、注目と評価に値すると考える。

4. 自己効力感と政治的自立

また、高校における専門教育は、学習意欲やその延長線上にある将来への意識だけではなく、一見専門性とは関わりがないように見える他の側面にも影響を及ぼしている。その一つが、自己効力感、すなわち「自分は人の役に立てると思う」という意識である^{vi)}。

図4は、専門高校生に関して、彼らが「専門分野にかかわる資格の勉強をする」かどうか、「専門分野に関わる進路について調べたり相談したりする」かどうか、自己効力感とどのよ

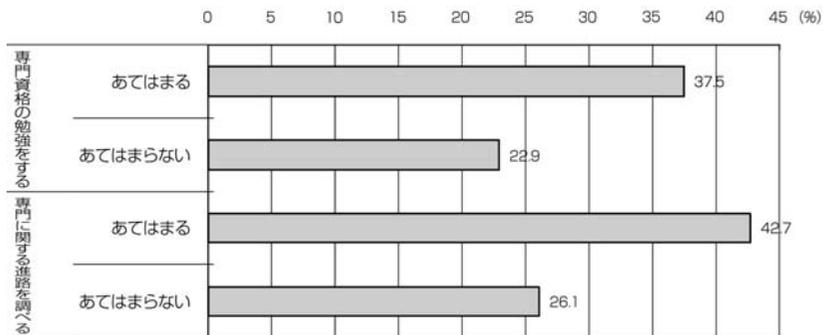


図4 専門への積極性別 自己効力感が高い者の比率(専門高校生)

うに関連しているかを示している。

ちなみに前者の資格勉強については専門高校生7割強が、後者の専門進路探索については約3人に1人が肯定している。図4からは、専門高校において資格の勉強をしたり、専門に合致した進路を調べたりすること、つまり専門領域の学習やそれに即した進路選択の積極性と、彼らの自己効力感が明確に関係していることがわかる。なお、自己効力感が中学時と比較してどう変化したかについて検討した結果においても、やはり資格勉強や専門進路探索をすること、自己効力感の高水準維持ないし向上との間に関連が見出された(図表は省略)。専門性の獲得や実現に向けての具体的な行動が、生徒たちの「自分は人の役に立てる」という実感と関係していることがうかがえる。

もう一つ注目したいのは、政治的自立性である。これは、自分の住む地域や国の政治への関心度と政治への参加意欲を加算した尺度である^Ⅷ。近年、若者の「政治離れ」が指摘されている中で、高校教育が生徒の政治意識を高めることができるか否かは検討に値する。政治的自立性尺度は2点から8点までの幅をもつが、そのうち5点以上を政治的自立性が「高い」層とみなすと、その比率は専門高校では約3割であるのに対し、普通科では2割弱にとどまる。政治的自立性が高い高校生の割合は総じて高いとはいえないが、専門高校ではそれがやや多くなっている。

図5には、専門高校・普通科高校それぞれについて、学校での勉強への積極性と政治的自立性との関係を示した。図からわかるように、専門高校・普通科高校いずれについても、勉強に積極的である者ほど政治的自立性が高いが、特に専門高校において勉強に積極的である者において政治的自立性は際立って高くなっている。

さらに、専門高校生の内部で、学ぶ内容が将来の仕事に関係しているという実感をもちつつ積極的に学んでいる場合、そのような実感がもてないまま学んでいる者よりもさらに政治的自立性は高まる(図6)。先の2節で述べたように、学ぶ内容が将来の仕事に関係しているということを肯定する者の比率は、専門高校のほうが普通科よりも30ポイント近く高い。そうした将来の有用性をもつ知識と技術を積極的に学ぼうとすること、言い換えれば仕事に関わる専門性を身につけようとするとは、実は仕事のみならず政治意識をも高めるといふ派生効果ももっているのである。職業人としての自負は、政治を担う市民としての自負にもつながっていることが推測される。

5. 高校における専門教育の多様な意義

以上、本稿では、都立の専門高校および普通科高校の2年生を対象とする調査データの分析結果の中から、高校における専門教育が、「職業的意義」のみならず、学習意欲や「柔軟な専門性」、自信や政治意識など多様な面での「意義」

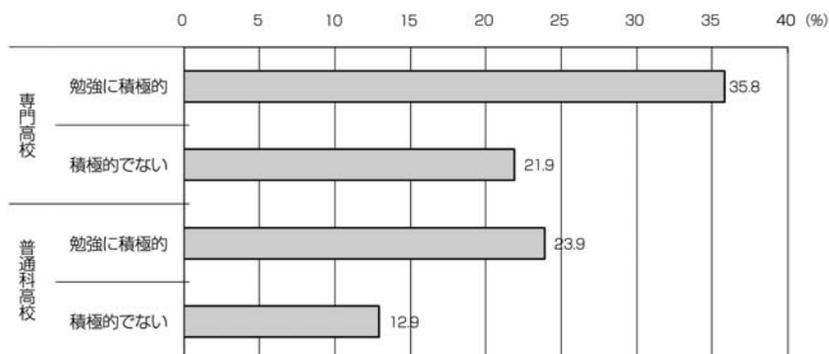


図5 専門高校／普通科高校別・勉強への積極性別 政治的自立性が高い者の比率

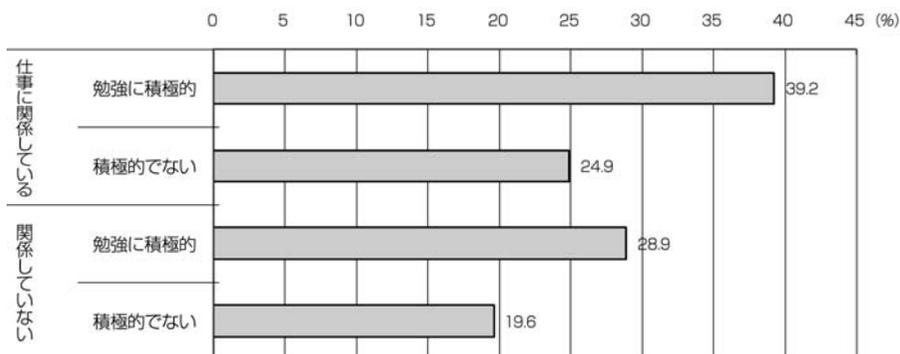


図6 仕事と学習との関連別・勉強の積極性別 政治的自立性が高い者の比率(専門高校生)

をもちえていることを紹介してきた。高校段階での専門教育が、このように様々なプラスの影響を生徒に及ぼしていることについて、もっと社会的認識が高まるべきだと筆者は考えている。

ただし、現在の専門高校が、理想的な教育を完璧に実現できているわけではない。本稿で示してきたデータを見ても、専門高校の生徒の約6割は、勉強が嫌いであったり、社会に出たらもう勉強はしたくないと考えていたりする(表1)。「ぜひこの高校に入学したかった」と考えていた者は半数である。専門性の獲得に熱心な生徒であっても、自己効力感が高い者の比率は4割前後にすぎない(図4)。政治意識が高い者の比率も、4割弱にとどまる(図5・図6)。本稿が主張してきた専門高校の長所は、入学難易度が同水準の普通科高校と比べたときに、様々な尺度に関して相対的に良好な値が得られているということ以上のものではない。それゆえ専門高校の「意義」とは、ある種、地味なものではある。専門高校に関しても、今後さらにその教育を改善・拡充していく余地や必要性は大きく残されているといえよう。

しかし、地味ではあっても確かな「意義」を、専門高校はもち得ている。日本社会全体として普通教育志向が強く、専門高校の人気の高いとはいえない社会状況があることを考慮するならばなおさら、そうした言わば不遇な状況のもとで専門高校が生み出している諸成果は、いっそ

う着目に値する。種々の国際比較調査から日本の子供や若者の学習意欲の低さや学習への意味づけの希薄さなどが明らかになっている中で、また本連載の第1回で述べたように若年労働市場がきわめて不安定化・劣悪化している中で、高校における専門教育がもつ多様な「意義」は、それらの諸問題に対していかなる取り組みが可能かについて、重要な手掛かりを与えてくれるものである。

- i) 筆者はこの科目の担当教員である。
- ii) 調査対象校の入試難易度については、学習研究社の『2009年入試用 都立に入る!』を参照した。
- iii) 以下の分析は東京大学教育学部4年の高木稚佳が執筆したレポート「高校生の『勉強意欲』」に基づく。
- iv) 以下の分析は東京大学教育学部4年の桑田恵が執筆したレポート「専門教育と学業適応」に基づく。
- v) この分析は東京大学教育学部4年の浅松珠江が執筆したレポート「専門高校における友人関係の研究」に基づく。
- vi) 以下の分析は東京大学教育学部4年の福本一威が執筆したレポート「アイデンティティとしての専門性が専門高校生にもたらす作用」に基づく。
- vii) 以下の分析は東京大学教育学部4年の今岡直之が執筆したレポート「『専門性』という『社会的承認』の可能性」に基づく。
- viii) 以下の分析は東京大学大学院教育学研究科修士課程2年の堤孝晃が執筆したレポート「教育の職業的レリバンスと社会的自立」に基づく。